

# インターネット時代の流行神

## —「願いの宮」を事例に—

黄 緑萍

キーワード 流行神、「願いの宮」、インターネット、祈願、現世利益

### はじめに

世界銀行の統計によると、日本では1990年からインターネットが普及し始め、当初の利用者は約2.5万人であった。10年後の2000年になって利用者数は3770万に上り、さらに10年後の2010年には9895万を超え、平均で1.3人に1人はインターネット利用者になっている<sup>1</sup>。もはやインターネットは現代人の生活においては不可欠になっている。

インターネットの普及は、あらゆる分野に大きな影響を及ぼした。もちろん宗教も例外ではない。早くも1996年東京都港区愛宕神社の松岡神職は神社のホームページを開設し、ヴァーチャル参拝を実現させ、それを皮切りにインターネット上には様々なヴァーチャル参拝が現れてきた。また、多くの神社や寺院はインターネットを通じて宗教情報を発信し、現在もはや情報氾濫といっても過言ではない。一方、宗教学者もインターネットと宗教との関係に注目している。まず挙げられるのは、1998年に、宗教状況について正確な情報を提供するために開設された宗教情報リサーチセンター（RIRC：Religious Information Research Center）がある。また、インターネットによる宗教の変容や宗教団体の発信情報に注目する先行研究が多く蓄積された<sup>2</sup>。ところが、インターネット

1 <http://data.worldbank.org/?display=graph> 閲覧日2012年7月31日

2 例えば、池上良正・中牧弘允（編）『情報時代は宗教を変えるか—伝統宗教からオウム真理教まで—』（弘文堂、1996年）、田村貴紀「インターネットの宗教情報：その可能性と危険性」『宗教と社会』第3号（1997）、土佐昌樹『インターネットと宗教—カルト・原理主義・サイバー宗教の現在』（岩波書店、1998）、生駒孝彰『インターネットの中の神々—21世紀の宗教空間』（平凡社、1999）、井上順孝（編）『インターネット時代の宗教』（新書館、2000）、『IT時代の宗教を考える』（法蔵館、2003）、黒崎浩行「日本宗教のインターネット利用の比較

の普及により、信者と宗教団体との間に交流の仕方が変わり、さらにインターネットを利用して宗教情報を発信することは新たな布教手段となりうるにしても、結局それで信者あるいは参拝者の増加に至ったのかという疑問が残った。井上順孝は、2005年前後の時点で、「宗教団体の公式サイトの数や、それらにアクセスする訪問者数は、現実の団体数・信者数に比べてあまり多くなく、教団体制や布教活動の面で大きなインパクトを与えているとまでは現時点ではいえない」[井上 2005: 39] と述べ、インターネットが布教の面で果たした役割に関して慎重な姿勢を見せている。ここ数年の『宗教年鑑』の統計より、各教団の教勢の低迷乃至縮小が持続していることは明らかで、現在においても、決してそのような状況が変わったとは言えない。

しかし、このような状況を背景に、インターネット上で発信することで流行り出した既存の宗教団体もある。大阪市天王寺区烏ヶ辻にある金光教桃山教会「願いの宮」はその例に当たる。本稿では、2005年からインターネットを通じて流行り出した金光教桃山教会「願いの宮」をインターネット時代の流行神として取り上げ、考察を行う。宮田登 [1972 b] によれば、流行神は突発的に流行し出し、一時期熱狂的な信仰を集め、その後急速に、信仰を消滅させてしまう神や仏であるとされる。流行神現象に関しては、柳田國男 [1910] と宮本常一 [1940] が既に注目し、いくつかの事例を報告した。その後宮田登 [1972 a] は主に近世の流行神を対象に研究を行い、流行神を学術用語として定義した。鈴木岩弓 [1992 a] は宮田の定義に現代的視点の欠如を指摘し、現在流行している神仏を事例として、流行のメカニズムを検討した。本稿では、これらの先行研究を踏まえ、「願いの宮」がいかに展開し、またいかなる特徴が見られるかを考察し、インターネット時代の流行神の実態に迫っていきたい。

---

分析：神社ウェブサイトの場合』『國學院大學日本文化研究所紀要』第83号（1999）、「日本宗教におけるインターネット利用の社会的文脈」『國學院大學日本文化研究所紀要』第85号（2000）、「ヴァーチャル参拝のゆくえ」『現代宗教2008 特集：メディアが生み出す神々』（2008）などの研究成果があげられる。

## 1. 金光教の概略

金光教桃山教会「願いの宮」を紹介するに当たり、まず金光教の概略を簡潔に説明しておこう。

金光教は1859年（安政6）備中国浅口郡大谷村に成立した教派神道系の新宗教である。教祖の金光大神（1814年～1883年）により立教され、天地金乃神を祭神とする。金光大神は幼名を香取源七といい、後に川手文治郎、赤沢文治、金光大陣と改名した。備中国占見村（現、岡山県金光町）の農家、香取家の次男として生まれ、12歳で隣村大谷村（同町）の親戚川手家の養子となった。23歳の年、義弟（鶴太郎）と養父（条治郎）を亡くし、家督を継ぎ、結婚した。後に、三度の自宅建築のたびに家族や飼牛の死に出会い、村人は金神の祟りと恐れた。42歳の年、病を患い、重体に陥った。親類が集い、祈祷を行ったところ、義弟（古川治郎）が神がかり、金神に無礼があったとのお告げを下った。ひたすらおわびをした後やがて病気が全快した。2年後、金神を信仰していた実弟（香取繁右衛門、香取金光教教祖）は神がかり、実弟の口を通じてお告げを受けていたが、まもなく自らも神意が分かるようになった。1859年（安政6）10月21日、お告げにより農業をやめて「取次」に専念するようになった。金光教では、このお告げを「立教神伝」とし、この日を金光教の立教とする。金光教は現在、1991年（平成3）に就任した金光平輝五代目教主の下、創設から150年を経過した。本部は岡山県浅口市金光町にあり、約1500の教会が日本全国に行き渡っている。金光教の本部および全国の教会には「広前」<sup>3</sup>があり、そこで参拝者に対する「取次」が行われる。

「取次」とは金光教の特徴とされるもので、「人の願いを神に、神の思いを人に伝え、神、人共に、あいよかけよで助かっていく世界を顕現するための働きをいう」[金光教本部教庁 1983：（付録）23]。つまり、取次者は人の悩みや願いを神に伝え、神からの神意を人に伝えることで、人と神との助かりを生

---

3 「一般には、神仏の前を敬つてという言葉。金光大神は自宅の上の間の床に神をまつり、その前に座って参拝者を取次いだ。神は、まつっている所にだけ鎮座しているのではなく、世界中が広前であると説いた」[金光教本部教庁 1983：（付録）26]。

み出し、「あいよかけよ」という調和関係を実現する。「あいよかけよ」とは、「相より相かかわるの意。金光大神はこの語をもって、神と人とのかかわり合いを示した。人は神の願いを受け、真実な生き方を求め立ち行くことになり、神もまた、人の真実な生き方により、その働きを十全に人の世に現すことができ、神みずからも助かるということを、この語は表現する。人間相互の関係に用いられる場合もある」〔金光教本部教庁 1983: (付録)12〕。金光教においては、「取次」は難儀に苦しむ人を助け、救済を求める方法でもあれば、布教の根源的な形態でもある。

金光教の布教活動については、創設後、1867年（慶応3）金光大神は白川家に入門して神職の資格をとり、布教活動に正統性を付与した。1868年（明治元）までに、信者による「取次」は備前、備中、備後を中心に行われたが、それからの20年間、山口、大阪、京都まで教勢が伸び、更に九州、四国、東京、北海道に布教が始まった。また後に、国内布教の推進につれて、台湾、朝鮮、満州、北米にも布教を開始した。ほかに、教師の養成施設、布教機関や財務機関もでき、1921年（大正10）には境内が拡張され大教会所が完成した。明治の始めから大正にかけて、金光教が著しく成長していることを示した。昭和初期に入り、金光教の教勢はしだいに固定化した。戦後、1951年（昭和26）、金光教はラジオ放送を開始し、布教の新たな方法として取り入れた。1914年（大正3）創刊した『金光教報』のほかに、1983年（昭和58）に『金光教経典』、1987年（昭和62）に金光教教団の新聞誌である『金光新聞』も刊行された。こうして、音声、映像や文書など様々なメディアが布教に活用された。しかし、布教方法の発達はずしも教勢の拡大をもたらしたわけではなかった。『宗教年鑑』の統計によると、戦後から金光教の信者数が減少し続け、1949年（昭和24）の信者数は693,314人であったが、1961年（昭和36）から60万人を割り、1975年（昭和50）から50万人を下回った。更に、近年の金光教の宗教教団、宗教法人、教師と信者数を表1にまとめたが、全体的に教勢が低迷している実態が読み取れる。これは金光教に限るものではなく、実際に多くの宗教集団が教勢縮小の問題に直面している。ところが、このような教勢縮小の状況を背景に、逆に参拝



者<sup>4</sup>が増え、インターネットから流行り出した金光教教会がある。次章から、金光教桃山教会「願いの宮」を流行神の事例として紹介していきたい。

表 1 金光教の教勢統計

年度	宗教教団			宗教法人	教師（外国人教師数）			信者
	教会	布教所	合計		男	女	合計	
1989年	1,652	22	1,674	1,518	2,169	2,183	4352	448,393
1990年	1,653	22	1,675	1,520	2,168	2,180	4348	445,657
1991年	1,649	22	1,671	1,516	2,162	2,184	4346	442,584
1992年	1,647	21	1,668	1,517	2,149	2,178	4327	436,916
1993年	1,647	22	1,669	1,517	2,131 (1)	2,175	4,306 (1)	436,805
1994年	1,646	22	1,668	1,518	2,128 (1)	2,180	4,308 (1)	433,340
1995年	1,646	20	1,673	1,518	2,103 (1)	2,175	4,278 (1)	430,189
1996年	1,646	16	1,662	1,518	2,093 (1)	2,174	4,267 (1)	430,189
1997年	1,642	15	1,657	1,515	2,090 (2)	2,173	4,263 (2)	430,189
1998年	1,627	15	1,642	1,505	2,085 (2)	2,170	4,255 (2)	430,189
1999年	1,607	13	1,620	1,489	2,076 (3)	2,167	4,243 (3)	430,190
2000年	1,595	13	1,608	1,481	2,062 (4)	2,150	4,212 (4)	430,190
2001年	1,586	11	1,597	1,475	2,046 (4)	2,137	4,183 (4)	430,190
2002年	1,576	13	1,589	1,469	2,034 (4)	2,112	4,146 (4)	430,190
2003年	1,567	12	1,579	1,462	2,030 (4)	2,108	4,138 (4)	430,190
2004年	1,563	10	1,573	1,459	2,027 (4)	2,080 (1)	4,107 (5)	430,190
2005年	1,559	8	1,567	1,456	2,012 (4)	2,064 (1)	4,075 (5)	430,190
2006年	1,555	8	1,563	1,483	1,998 (3)	2,030 (1)	4,028 (4)	430,188
2007年	1,548	9	1,557	1,445	1,991 (3)	2,021 (1)	4,012 (4)	430,188
2008年	1,544	9	1,553	1,444	1,985 (3)	2,003 (1)	3,988 (4)	430,145
2009年	1,538	9	1,547	1,437	1,952 (3)	1,987	3,939 (3)	430,105
2010年	1,535	8	1,543	1,435	1,959 (3)	1,974	3,933 (3)	430,090
2011年	1,533	8	1,541	1,432	1,938 (3)	1,960	3,898 (3)	430,055

文化庁（編）『宗教年鑑』（平成元年～平成23年）より筆者作成

4 金光教においては、入信が明確に定義されてないため、信者であるか否か判断しにくい。金光教教団は信者と判断する人の数を毎年申告するが、本稿では、信者という呼び方を避け、金光教桃山教会「願いの宮」で参拝や祈願などの行動を取る人を「参拝者」や「祈願者」と呼ぶ。

## 2. 「願いの宮」

本章では、「願いの宮」の概況、開教から現在までの展開過程、及び現在の宮司桃山きよ志はいかなる取り組みで「願いの宮」の参拝者を増やしたのかを紹介する。

### 2-1. 「願いの宮」とは

「願いの宮」（写真1、写真2）とは大阪市天王寺区烏ヶ辻にある金光教桃山教会の名称である。現在の広前は2001年に新築されたもので、一階は広前会堂で、「取次」を行う場所であり、二階は集会室として行事後の茶会などが行われる。



写真1 「願いの宮」の外観  
(2012年4月20日撮影)



写真2 「願いの宮」の看板  
(2012年4月20日撮影)

現在の宮司桃山きよ志は（本名井上清志、1974年7月5日生まれ）、教会長就任後、地元と教会の繁栄の願いを込め、地名の「桃山」に因んで桃山きよ志と改名した。桃山によると、本人がもともと教会を継ぐ意志がなく、せいぜい就職して定年後金光教教師を務めるだろうと考えていたが、20歳の年の体験をきっかけに、金光学院入学を志した。「大学受験前夜、泊めてもらった友人宅で、友人が高熱を出した。一晩中介抱をすることになり、その時『目の前でうなされる友人の姿が数多くの救いを求めている人の姿に見え、お前の役は人を助けることだと、神から呼ばれていると感じた』。帰阪後、受験結果の可否を待たずに、金光学院入学を決心し、一年間教会修行に入った」（「道を切り開く世代」編集委員会 2004：2）。1997年金光教の布教資格を得て、1999年

より七代目として教会を継承した。それ以来、常に「結界」<sup>5</sup>にて「取次」に専念している。2004年桃山は桃山教会を「願いの宮」と命名し、2005年「願いの宮」ウェブサイト<sup>6</sup>を立ち上げた。

「願いの宮」では、参拝者が直接参拝に行く場合は、「願いの宮」が用意した「願いごと奉納記入書」（以下は「祈願書」と略す）に記入し、それを宮司に渡す。宮司は結界（写真3）で参拝者と会話を交わし、神に「取次」をする。ホームページ開設以降、直接参拝に行けない人でも、インターネットを通じて「取次」をしてもらうことができるようになった。インターネットを通じて祈願する場合は、大きく分けて幸福祈願と特別祈願の2種類ある。幸福祈願とはメールで祈願することで、つまりホームページの記入欄に願い事を記入し、宮司にメールを送れば祈願が完成する。桃山によると、2010年6月から2012年5月末の24ヶ月には、全部で9147件の祈願メールが届いている。1日に2、3件と極端に少ない時もあるれば、急に50件ほど来る時もあり、平均的に毎日10数件であるという<sup>6</sup>。特別祈願とはまず祈願者は祈願用紙をホームページからダウンロードし、それを記入して「願いの宮」に郵送し、宮司はそれを神殿に奉納し特別集中祈願する。つまり、手紙で祈願することである。写真4は祈願者から届いた祈願手紙の一部である。要するに、「願いの宮」に行けない場合は、メー



写真3 「結界」  
（神職は桃山、2012年4月21日撮影）



写真4 特別祈願の手紙  
（一部のみ、2012年4月21日撮影）

5 「神に向かって右側に設けられた座。金光大神は、この座にあって取次の業を行った。本部広前および各地の広前で、この形式は継承されて、今日におよんでいる」[金光教本部教庁 1983：（付録）16]。

6 その前の祈願メールは桃山のパソコンの破損により計算が不可能になる。

ルと手紙を通して、「願いの宮」に祈願することが可能になっている。2005年インターネットで発信して以来年200人以上、多い年には500人の参拝者が訪れる。桃山によると、延べ3000人の新規参拝者が増えたという。

インターネットを通じて「取次」をする事例はすでに2002年に川端亮・兼子一により報告された。当時事例として取り上げられたのは金光教尼崎教会（兵庫県尼崎市）であった。尼崎教会の教師津田昇平は1999年に「若先生の箱庭一心の安らぎを求めて―」<sup>7</sup>というホームページを開設し、その中に〈相談室〉と〈お取次〉のコーナーを設定することで、インターネットを通じて相談を受けたり、「取次」を行ったりするようになった。その利用状況は以下の通りである。

今までに〈相談室〉で受けた相談者はおよそ300人ほど、〈お取次〉は400～500人ぐらいという。2000年始めには、〈相談室〉と〈お取次〉では7対3ぐらいの割合で相談が多かったが、2001年3月頃に半々となり、現在では3対7と〈お取次〉が多くなっている。そして、メールでの取次から教会へ参拝し、お結界での取次を受けたり、毎日天地金乃神様に祈りながら生活する者、これらを信者として数えるならば、2001年夏の神様のお知らせ以降およそ30人ぐらい増え、1999年9月のホームページ開設以来、合計50人（2002年6月現在）を越えるにいたっている。さらに、家でご祈念するぐらいの人は、100人を超えていると津田は述べている〔川端亮・兼子一 2002：167〕（括弧内原文）。

当時より10年経った現在においても、インターネットを通じて「取次」をする事例はほかに見られておらず、また、桃山もインターネットを通じて「取次」をする教会があまりないと述べる。その意味で、尼崎教会の試みは先端的である。当時インターネットの普及がまだ十分でない状況もあるが、上の数字から、尼崎教会のホームページの利用者、及びホームページを通じて「取次」を受ける人は桃山教会に比べれば少なく、参拝者を寄せ集める効果が限られていることが考えられる。

---

7 <http://hakoniwa.jp/hakoniwa/win.html> 閲覧日2012年7月31日

## 2-2. 「願いの宮」の展開過程

ここでは、「願いの宮」はいかに成立し、現在に至るのかを概観しておきたい。1881年（明治14）頃、桃山教会の「信心の祖」とされる井上げんは夫の三代目井上又兵衛（井上家当主は代々「又兵衛」の名を継ぐしきたりであった）の病氣平癒を願い、難波村の近藤与三郎（藤守）の広前に参拝したことを皮切りに、井上家は代々金光教教師を務め（表2）、教会成立から現在に至るまで百年近くの歴史を持っている。現役の宮司桃山きよ志は七代目の教会長であり、血統でいうと五代目の子孫である。

表2 桃山教会歴代教会長

信心の祖	井上げん（1836. 4. 3～1921. 8. 23） 1881年（明治14）頃、難波村界限でより糸製造業を営んでいた三代目井上又兵衛の妻で、三代又兵衛の胃腸病の平癒を願い、難波村の近藤与三郎（藤守）の広前に参拝。
初代教会長	井上定次郎（1889. 8. 20～1964. 8. 20） 四代井上又兵衛の子。三代井上又兵衛とげんの孫。1913年（大正2）金光教教師拝命。1919年（大正8）大阪・難波教会で修行した四代井上又兵衛と定次郎により桃山駅前に桃山教会が開教。1924年（大正13）より、父・又兵衛に教会長を譲り、教団のご用にあたる。
二代教会長	四代井上又兵衛（1866. 10. 5～1944. 5. 31） 1892年（明治25）、28歳で難波教会に入り、近藤与三郎（藤守）帰幽後も手代わりとして晩年まで難波の結界奉仕にあたる。1924年（大正13）より、二代教会長となる。
三代教会長	井上定次郎（1889. 8. 20～1964. 8. 20） 1942年（昭和17）、再び三代教会長に。
四代教会長	井上恵一（1918. 10. 13～1966. 10. 18） 井上定次郎の子。1944年（昭和19）金光教教師拝命。わずか2年の在任期間であった。
五代教会長	井上禮子（1924. 2. 14～2001. 7. 27） 井上恵一の妻。1954年（昭和29）金光教教師拝命。夫・恵一の帰幽にあたり、五代会長に。
六代教会長	井上嘉廣（1947. 7. 5～） 井上恵一と禮子の子。1968年（昭和43）金光教教師拝命。1999年（平成11）、開教80年記念祭を機に教会長を息子・清志に譲る。同時に、布教組織「桃下会（とうかかい）」初代会長に就任し、以来、主として結界奉仕以外のご用にあたる。
七代教会長	井上清志（1974. 7. 5～） 井上嘉廣の子。1997年（平成9）金光教教師拝命。1999年（平成11）七代教会長に就任。

（「道を切り開く世代」編集委員会 2004：16）より筆者作成

各時期の特徴により、「願いの宮」の発展過程を戦前までの繁栄期、戦後の停滞期、桃山就任後の復興期の三つに分けて考察する。

### ① 戦前までの繁栄期

開教から戦前までは、桃山教会の繁栄期とする。戦前の桃山教会は桃山駅前（現ＪＲ桃谷駅前）で開かれ、1929年およそ六百メートル離れる現在地に移転した。当時の風景（写真５）について桃山はこう語っている。

戦前の桃山教会というのは、敷地がこの駐車場の前（道ぎりぎりのところ）までで、二階建てで、銅板の屋根が葺いてあって、信奉者数も千人を超え、大祭には道に出店が並んだと言われています [[道を切り開く世代] 編集委員会 2004：21]。

また、桃山によると、戦前桃山教会に勤める神職は多い時に11人にもいたということで、当時よほど繁栄していたことが窺える。



写真5 戦前の風景  
[[道を切り開く世代] 編集委員会 2004：20]



写真6 戦後の様子  
[同左：PHOTOS]

8 桃谷駅とはＪＲ西日本大阪環状線の駅である。1895年桃山駅が開業し、1905年桃谷駅に改称した。

## ② 戦後の停滞期

戦後の再建から桃山が教会長に就任するまでは教会の停滞期とする。戦後、桃山教会は再び造営され、写真6に左横は玄関、手前は集会室で、その上に大きな金光教の看板が掲げられている。2001年現在の教会が新築されるまで約60年間使用されてきた。その間に教会は再建されたが、戦前の繁栄を取り戻せず、1999年桃山が教会長に就任した頃の状況については、「一人も来ない日が続いた」と語った。また、当時教会及び金光教の衰退を痛感した記述もある。

それ（戦前の桃山教会）が戦争で焼けたんです。教会の建物は焼けて、又兵衛は疎開先の金光で寿命で亡くなり、信者さんの家も焼けて、全国へ散り散りになってるでしょ『道を切り開く世代』編集委員会 2004：21]。思っているのは、うちの教会が大きくなったらええとかそういうことじゃなくて、金光教全体が大きくなってほしい。そのためには、一個一個の教会がご比礼を頂く以外にないと思いつている。衰退していく現状を見た時、今やらないといつやるねんというのはありますね『道を切り開く世代』編集委員会 2004：18]

このように桃山は自分が「道を切り開く世代」と自覚しながら、教会の復興を目指し、いろいろな試行錯誤を行い始めた。

## ③ 桃山就任後の復興期

1999年桃山の教会長就任を皮切りに、桃山教会は復興期を迎えた。1999年から2004年までは第一期で、2005年からは第二期とする。

第一期においては、桃山は若き教会長として注目され、金光教の同人誌『凡愚』第13号（2002年10月）及び桃山教会誌『道を切り開く世代』の発行により、金光教内部で影響を広げたと考えられる。またこの時期、参拝者も少しずつ増えてきた。その様子については、桃山はこう述べた。

この二年で約五十人くらいの人が増えて、五月二十五日（平成十五年）の春の大祭も見知らぬ人が三人参っておられた。で、今日（平成十五年六月五日）までの十日間にまた新しい人が三人参って来ました『道を切り開く世代』編集委員会 2004：8]

この時期参拝者が増え始めたが、まだ少人数に留まっていることが窺える。

2005年から第二期に入り、桃山がインターネットを利用し、桃山教会の情報を発信し始めた。結果としては、2006年から年200人以上、多い年には500人の新規参拝者が増えてきた。またそれに伴い、桃山教会は「願いの宮」の名で、悩み相談、祈願成就や巫女体験<sup>9</sup>の場として新聞、雑誌、テレビに取り上げられるようになり（表3）、更に広く知られるようになった。

表3 主なマスメディア登場記録

年 月	マスメディア
2007年1月	船井幸雄グループ月刊誌『Funai ★ Media』
2007年5月	『朝日中学生ウイークリー』
2007年11月	マキノ出版・美容健康雑誌『ゆほびか』
2009年1月	バイリンガル雑誌『ひらがなタイムズ』
2010年3月	J：COMチャンネル関西エリア番組『8時です！生放送！！』
2010年12月	関西テレビ『よ～いドン！』
2011年6月	『朝日新聞』
2011年6月	朝日放送番組『おはよう朝日です』

### 2-3. 桃山きよ志の取り組み

それでは、教会復興の担い手として、宮司の桃山きよ志はいかなる取り組みをしてきたのか考察する。

桃山きよ志は1999年七代教会長に就任して以来の五年間、朝6時から夕方6時まで結界における座行に入った。その時から、いかにして戦前の繁栄を取り戻すかを考え、動き始めた。桃山の取り組みは大きく分けて二つの部分がある。

9 「願いの宮」では、巫女のヘアメイク、着付け、所作などを体験できる。女性に限り、年齢不問。一回の体験時間は約2時間。



一つは、内部での改革。桃山教会を「祈りやすい」且つ「入りやすい」所にするように、それまでの習慣や作法に拘らずに、大胆に改革を進めたのである。例えば、①「願いの宮」という新しい教会名をつける。②祭典の祭詞は教団から配られる文例ではなく、桃山教会独自のものを使う。③参拝者のニーズに応じ、柔軟に祭祀を行う。例としては、3年前から執り行い始めたペット祈願祭が挙げられる。④巫女体験や雅楽教室などの項目も積極的に取り入れる。こうして、参拝者と教会との距離を縮ませ、より多くの参拝者を引きつけようと様々な工夫を凝らしたのである。

もう一つは、外部への発信。2005年、桃山は携帯電話用のブログを開き、それを見て富山県から一人の参拝者が訪れた。そのことが外部発信の始まりとなった。続いて、桃山はミクシィで、「願いの宮」コミュニティを開設した。現在の会員は800人を超えている。コミュニティ会員の増加にしたがい、現地に訪れる参拝者も急増した。またその後、桃山はインターネットを利用し、ブログとホームページを開いた。2011年から、フェスブックにも加入し、引き続き積極的に発信している。

このような桃山の取り組みにより、就任後参拝者が増え続けてきたのである。特に、インターネットを利用し発信したところ、「願いの宮」はまずインターネットというヴァーチャルな世界から流行り出し、そのまま現実世界にも反映し、現地に急増した参拝者をもたらした。

### 3. 現地とインターネットにおける祈願とおかげ—「祈願書」と「おかげの感想板」から—

では、「願いの宮」の参拝者はいかに増え、また何を願い、どういうおかげをもらったかを分析する。ここで区別をするため、現地で祈願する参拝者を「現地祈願者」、ネットを通じて祈願する人は「ネット祈願者」と呼ぶ。現地祈願者が「願いの宮」に訪れる際に記入した祈願書は2006年からの6年間分で、合計4079枚（写真7、一枚に複数の名前が記入される場合があるため、延べ4138

人)がある<sup>10</sup>。また、ホームページの「おかげの感想板」<sup>11</sup>にネット祈願者がどういうおかげ<sup>12</sup>をもらったかというおかげ情報が2006年から2011年まで合計848件記載されている。本章では、これらの祈願書とおかげ情報を資料として、対照的に分析を行う。



写真7 祈願書  
(2012年4月20日撮影)

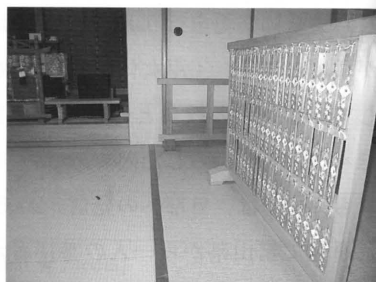


写真8 おかげ絵馬<sup>13</sup>  
(2012年4月20日撮影)

### 3-1. 現地の場合

#### ① 祈願書数の経年変化

まず、祈願書数の経年変化を次頁の図1にまとめた。図1が示すように、2006年から祈願書数が急増し、2008年にピークに達している。その後はだんだんと落ち着き、2011年の祈願書数は再び増えてきた。つまり、2005年桃山がインターネットから発信して以来、現地祈願者の増加が顕著である。2008年ピークに達した後、2年連続の減少を経たが、2011年から再び現れた現地祈願者の増加は、前年度から「願いの宮」がテレビに取り上げられたことの影響があると考えられる。

10 2006年から「願いの宮」では祈願者に祈願書を記入してもらうことになったゆえ、その前の祈願内容を残す記録がなかった。

11 「おかげの感想板」とは祈願書者がもらったおかげを人に伝え、分けようとする目的の掲示板である。

12 「ご利益」の意。「おかげ」とは金光教の用語である。

13 祈願者が祈願成就の際、絵馬の裏側にお礼を書き、柵にかける。

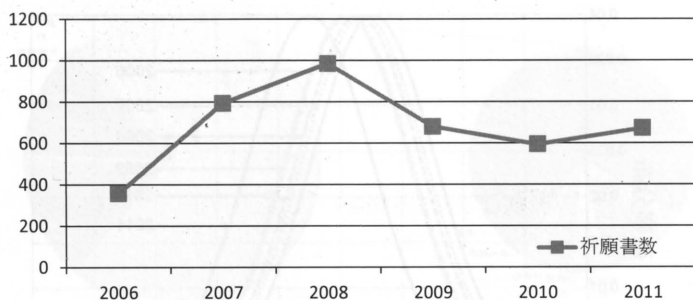


図1 祈願書数の推移図（祈願書より筆者作成）

## ② 現地祈願者の男女比と年齢層

続いて、現地祈願者の男女比と年齢層を見よう。「おかげの感想板」に年齢が記載されていないため、祈願書だけを分析することができる。性別は祈願書に書かれていないが、4138人の祈願者の内、名前と祈願内容により女性と判断するのは3217人があり、全体の77.8%を占める。女性祈願者が圧倒的に多いことが一つの特徴と言える。

また、年齢が記されたのは4059人があり、最年少は1歳で、最高年齢は90歳である。全体的な平均年齢は38.58歳で、女性と男性の平均年齢はそれぞれ38.73歳と38.05歳である。鈴木により報告された広島県府中市にある首無地蔵の場合は、同じく女性のほうが多いが、信仰者の体験談をまとめた『礼賛記』を分析した上で、信仰者の年齢は「男が20歳から87歳までの分布で平均62.25歳、女が17歳から81歳までで平均57.25歳となっていた」[鈴木 1992 a :17]とあった。首無地蔵の事例と比べれば、比較的若年層参拝者が中心である特徴が見られる。

それに、各年の年齢分布は図2にまとめた。明らかに2011年の参拝者の平均年齢は高くなっている。2012年5月、筆者が桃山にインタビューする際、桃山は参拝者の増加について「テレビに出た後、年配の方が多く訪れた」と語った。「願いの宮」の参拝者は若年層を中心としているが、テレビ放送により、年配層に影響を広めたとと言える。

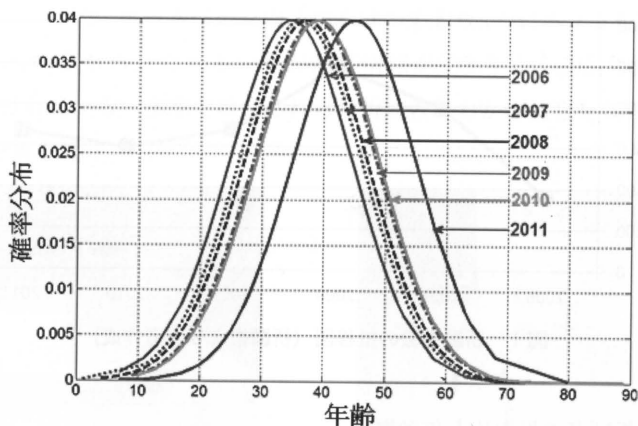


図2 参拝者の年齢分布（祈願書より筆者作成）

### ③ 現地祈願者の地域分布

さらに、祈願書を通し、現地祈願者の地域分布を分析しよう。4138人の内、出身地が確認できるのは4076人があり、これらの参拝者がほぼ日本全国に行き渡ることが分かった。図3が示しているように、7割以上の参拝者が近畿地方出身で、そのうち大阪府出身者が全体の半分くらいで、大阪市出身の参拝者が3割近く占めている。2番に多い関東地方の参拝者は1割も超えていない。ゆえに、「願いの宮」の影響圏が大阪市及び大阪府を中心とする近畿地方と考えられ、地元に着くという流行神の特徴が窺える。

この数字を首無地藏と比べてみれば、信仰者の体験談をまとめた『礼賛記』からその信仰圏は「広島県居住者が全体の57.8%を占め、その内の89.6%（全体の51.8%）が旧備後国で占められ」[鈴木 1982: 405]、また岡山県東南部にある横樋観音の場合、参拝ノートから「参拝者の居住範囲は岡山県内だけで88.2%を、さらにいえば観音像の鎮座している岡山市内だけで59.7%を占めている」[鈴木 1992b: 148]と鈴木が述べ、割合でいうと差があるにしても、信仰対象所在の市あるいは県の出身者、つまり地元の人がメインであることが共通している。

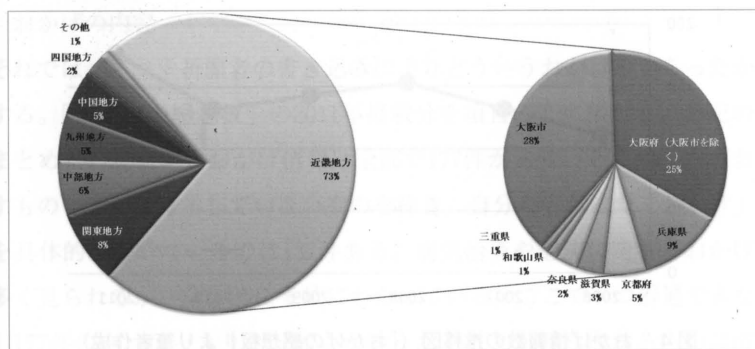


図3 現地祈願者の地域分布（祈願書より筆者作成）

#### ④ 現地祈願の内容

それでは、現地祈願者は「願いの宮」に何を祈るか。祈願書から見ると、様々な祈願があり、そのうち「健康・病気回復」、「仕事・商売」、「恋愛・結婚」、「金銭・経済」、「人間関係」や「合格成就」などに関係する祈願内容が特に多く、そのほか、「幸せ」、「平穏」、「安心」、「楽しい」、「楽」などの抽象的な祈願内容も多く見られる。また、祈願対象は「自分」が一番多いが、「家族」、「知人・友人」、「ペット」なども対象になっている。全体的に特定の祈願内容に偏ることがないため、「願いの宮」の神はある特定の分野の機能神ではなく、万能の神とされていることが窺える。

### 3-2. インターネットの場合

#### ① おかげ情報数の経年変化

図4にインターネットにおけるおかげ情報数の経年変化をまとめた。その増減の傾向は現地とほぼ一致しており、2006年からおかげ情報数が急増し、2008年にピークに達した後減り始めた後、2011年に再び増加した。また、現地の状況とも共通しているが、一回目の増加はインターネットからの発信、二回目の増加は前年度から「願いの宮」がテレビに取り上げられたことの影響以外、フェスブックの開設なども増加の原因と考えられる。

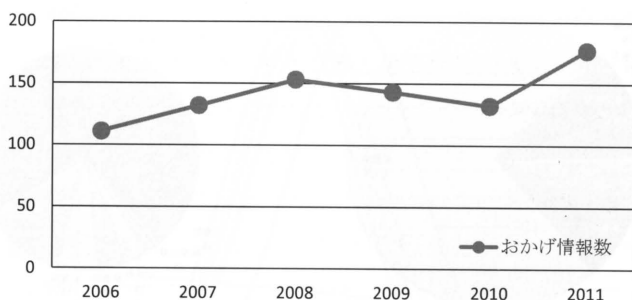


図4 おかげ情報数の推移図（「おかげの感想板」より筆者作成）

## ② ネット祈願者の地域分布

「おかげの感想板」よりネット祈願者の地域分布は図5にまとめた。現地祈願者と同じように、大阪府及び近畿地方の出身者が一番多いが、ただ全体的に占める割合が現地参拝者に比べればずっと低い。そのうち近畿地方の出身者が3割近くを占め、大阪府の出身者が2割に届かず、2番目に多い関東地方と大差がない。つまり、インターネットの場合になると、「願いの宮」は地域性が保たれているにしても、現地ほど強くないことが分かる。

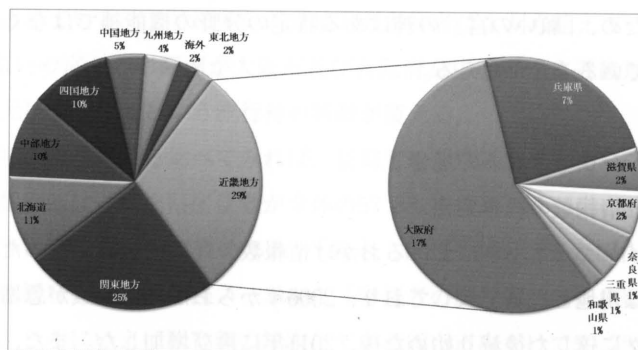


図5 ネット祈願者の地域分布（「おかげの感想板」より筆者作成）

### ③ おかげの内容

それでは、ネット祈願者の書き込みによりどういうおかげをもらったかを考察する。「おかげの感想板」の2011年掲載分を項目ごとに集計し、下記のようにまとめた。2011年のおかげ情報は全部で177件があり、その内、ただお礼を表すものとはっきり示していないものを除き、自分がもらった「おかげ」の内容を具体的に書いているのは137件ある。病氣治癒や退院に関するおかげが一番多く見られるが、全体的に多岐にわたっている。ここで一つ看過できないのは、177件の内、はっきりと「願いが叶った」ことが読み取れるものは67件に上ることである。つまり、祈願者にとって何が叶ったかは別にして、「願いが叶った」こと自体が一番大きな「おかげ」である。その前数年のおかげ情報にも、やはり同じような傾向が見られる。こうしてみれば、「願いの宮」の神は願いを叶えてくれる神であり、まさに「願いの神」と言えよう。

病氣治癒・退院	32	家族関係円満	3	通夜無事	1
仕事・就職	17	カウンセリング順調	2	友人が安定した	1
無事・安全	13	よい天候	2	犬がもらわれた	1
合格	10	紛失物回帰	2	ガソリン満タン	1
メンタル	7	縁切り	2	子供の交友	1
悩み解消	5	学業上達	2	費用の支払い解決	1
人間関係円満	5	家事が完成した	1	ほしいもののゲット	1
恋愛・結婚	5	父から連絡がきた	1	スキーに行けた	1
復縁	4	犯人逮捕	1	新年会ができた	1
検査順調	4	目標達成	1	ペットの帰宅	1
子宝・安産	3	イベント参加	1		
金銭・経済	3	教室継続達成	1		

以上、現地とインターネットにおける祈願とおかげの情報を手がかりに、祈願者の人数推移、地域分布、祈願内容などを通観してきた。「願いの宮」は現

実の世界とインターネットの世界にまたがり、そこにインターネット上のヴァーチャルな「願いの宮」と現実にあるリアルな「願いの宮」が対照的に存在する。黒崎浩行が「このような従来からの『参拝のヴァーチャル化』は、実際に神社へ参拝しないで済むようにするものではない。むしろ逆に、参拝という『アクチュアル化』への方向を定め、それを促すものとして機能している。このことは交通機関の発達や、新しい情報通信基盤の確率による綿密な情報の提供によって強化されている」〔黒崎 2008:116〕と指摘したように、インターネット上の「願いの宮」に対するヴァーチャル参拝が増加すれば、現実の「願いの宮」にも現地参拝が増加する効果がもたらされる。その逆の場合、現地参拝の増加により、インターネットにおいて人気が高まり、ヴァーチャル参拝が流行り出すようになることも十分あり得る。要するに、ヴァーチャル参拝と現地参拝は互いに推し進め、「願いの宮」の展開を促したのである。

#### 4. 「願いの宮」の特徴—流行神として—

さて、インターネットの発展を基盤として流行り出した「願いの宮」はいかなる特徴が見られるか。「願いの宮」は既存の神社仏閣が急速に流行り出した流行神の一事例として考えられるが、その伝播過程においては、インターネット時代ならではの特徴がいくつかまとめられる。

①参拝者（祈願者）増加の契機。これまで鈴木に取り上げられた首無地藏などの場合、新聞やテレビという従来のマスメディアの報道が参拝者増加の契機となった〔鈴木 1992a : 43〕のに対して、「願いの宮」の場合、テレビの報道により参拝者の増加を促したことも確認できたが、マスメディアに取り上げられる前にすでにインターネット上の発信により、参拝者を増やすことに成功した。特に、ミクシィのようなSNS（ソーシャルネットワークサービス）が参拝者の増加に大きな役割を果たしたと考えられる。

②祈願方法。「願いの宮」では、現地に行き祈願することもできれば、インターネットで祈願し、宮司に取次してもらうことも可能になっている。そのようなやり方は金光教においても稀な例である。実際に神仏の所に行き、祈願したり、



おかげをもらったりすることが一般に見られるが、「願いの宮」の場合、祈願者は神と直接関わらなくてもおかげがもらえるため、祈願方法が多様になっている。

③霊験譚。流行神を起こさせる場合、必ず神や仏の新しい霊験を創作する宗教者が介在していると宮田は論じた〔宮田 1972 a : 28〕。「願いの宮」の場合も多くの「霊験譚」が見られる。これらの「霊験譚」は祈願者の祈願成就の体験が中心で、祭神の天地金乃神の顕現などに関する記述は一向見られなかった。祈願者は既存の金光教教義に触れず、「願いの宮」の神を願望実現の神として仕上げられていることが窺える。

### 終わりに

このように、現地祈願にしろ、ネット祈願にしろ、祈願者が「現世利益」を求める志向は普遍的に見られる。しかし、現代人の信仰における新たな傾向も「願いの宮」により示唆された。一つは、特定の宗教団体の体制に縛られないことである。桃山は参拝者については、「彼らは自分が金光教の信者と思っていないし、私も彼らが金光教の信者と思っていない」と述べ、参拝者と特定の宗教団体との相互関係が極めて疎遠で、自由であると思われ、もはや「信者」という言葉はほとんどの参拝者に当てはまらなくなっている。もう一つは、熱狂さの希薄である。特に、不可思議な体験による入信という行為はなかなか見られず、その背後に神の靈威や靈力に対する意識が低くなってきたことが推察できる。「願いの宮」の場合は、宮田により定義された狂熱な信仰から生ずる流行神に齟齬するが、祈願する対象及び現世利益をもたらし対象とされ、急速に信仰を集めることが明かである。むしろ、その狂熱さの希薄は現代、特にインターネットの世界における流行神に対する信仰の実態と考えられる。

いずれにせよ、「願いの宮」はインターネットを通じて祈願者を拡大し、祈願者はインターネットを通じて気軽に、便利なおかげのもらえる宗教を手に入れる。「願いの宮」の流行は現代人のニーズにうまく応えた結果と言えよう。今後も流行神の事例に焦点を当て、現代人の信仰を注目し続ける。

## 謝 辞

本稿は文部科学省国費外国人留学生制度の援助によって行われた研究成果の一部である。執筆にあたり、井上清志宮司ご一家にはご協力いただき、また、鈴木岩弓教授、庄司一平博士には有益なご助言をいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

## 参考文献

- 井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂、1996、『新宗教教団・人物事典』、弘文堂
- 、2003、『I T時代の宗教を考える』、法蔵館
- 、2005、『現代宗教事典』、弘文堂
- 川端亮・兼子一、2002、「I T化された宗教実践—ある金光教教師の挑戦—」、宗教社会学会編『新世紀の宗教—「聖なるもの」の現代的諸相—』、創元社
- 黒崎浩行、2008、「ヴァーチャル参拝のゆくえ」、国際宗教研究所編『現代宗教 2008 特集：メディアが生み出す神々』、秋山書店
- 国際宗教研究所編、2000、『インターネット時代の宗教』、新書館
- 金光教本部教庁、1983、『金光教経典』、金光教本部教庁
- 鈴木岩弓、1992 a、『「流行神」の形成とその展開に関する実証的研究—中国地方の事例を中心に—』（研究成果報告書）、島根大学教育学部
- 、1992 b、『「流行神」の誕生と霊威譚—横樋観音の場合—』、『島根大学教育学部紀要』第26巻
- 、1995、『「首無地蔵」信仰の展開構造』、『宗教研究』第69巻 3 輯、日本宗教学会
- 「道を切り開く世代」編集委員会、2004、『道を切り開く世代—桃山教会長井上清志 五年の行から見えてきたもの』、金光出版
- 宮田登、1972 a、『近世の流行神』、『日本人の行動と思想 17』、評論社
- 、1972 b、『流行神』、大塚民俗学会編『日本民俗事典』、弘文堂

——、2006、『はやり神と民衆宗教』、『宮田登日本を語る 3』、吉川弘文館  
宮本常一、1940、「はやり出す神」、『民族文化』第8号、山岡書店  
柳田國男、1997、「石神問答」(1910)、『柳田國男全集 1』、筑摩書房

ウェブサイト

「願いの宮」公式サイト <http://negainomiya.com/>

# Fashionable Gods in the Age of Internet: A Case of Negainomiya

Lvping HUANG

Negainomiya is the name of the Konkokyo Momoyama Church, which was founded in Osaka City about 150 years ago. The present head minister is Kiyoshi Momoyama who was born in July 5th, 1974. He acquired the mission qualification of Konkokyo in 1997 and inherited the church as the seventh head minister in 1999. In order to revive the declining church, he broke through the traditional viewpoint for church and resorted to various communication tools including digital media to advertise Negainomiya. Since the internet website of Negainomiya was constructed in 2005, thousands of people has been praying on the website directly after 2006. In addition, a total of 3,000 new prayers visited Negainomiya until now.

In this paper, considering Negainomiya as an example of new fashionable gods in the age of internet, I would like to clarify the process how it developed and the characteristics that it indicated. I show that along with the increase of internet prayer, the number of those who visited Negainomiya also increased obviously. This phenomenon proved that virtual and actual worshiping activities promote mutually. Also as the example shows, not only the way of communication between prayer and religious groups got changed, but also two tendencies appeared distinctly that people would not like to be shackled by the rules of religious groups and they may pay much more attention to personal and actual benefits than the god itself.